

関係各位

大阪府環境農林水産部農政室長

## 病害虫発生予察情報について

標記について下記のとおり発表したので送付します。

## 令和3年度 病害虫発生予察 特殊報 第2号

- 1 病害虫名 : ビワキジラミ *Cacopsylla biwa*
- 2 発生地域 : 寝屋川市
- 3 寄生物 : ビワ
- 4 発生の状況
  - (1) 令和3年6月14日、寝屋川市内の畑のビワ成木4本の葉上にキジラミ類と思われる成虫が寄生していることを確認した。
  - (2) 成虫(写真1)を採集し、農林水産省神戸植物防疫所に同定依頼したところ、ビワキジラミであることが確認された。
  - (3) 園主には登録農薬を用いて防除を徹底するよう指導した。
  - (4) 国内では、平成24年に徳島県で初めて発生が確認され、その後、香川県、兵庫県、和歌山県、岡山県および愛媛県で発生の報告がある。
  - (5) 府内では本種の発生確認は初めてである。
  - (6) 本種は平成24年に国内初確認され、学名が付けられた新種の害虫で、海外での分布等詳しいことはまだわかっていない。
- 5 形態と生態
  - (1) 本種はアブラムシやカイガラムシ、コナジラミなどに近いカメムシ目の昆虫であり、現時点で判明している寄生・増殖可能な植物はビワのみである。
  - (2) 成虫には2対の翅があり、セミに似た形態をしているが、全長2.5~3.5mm程度とかなり小さい。体は黄褐色~暗褐色で、白色の線状やまだら状の斑紋が多数ある。前翅は透明で、その外縁に沿って黄褐色の不明瞭な小斑紋が4~5つ並んでいる。成虫は葉裏の主脈沿いで師管液を吸汁する。
  - (3) 幼虫は扁平な楕円形で、全長2mm程度、体に褐色のまだら模様がある。体の左右に褐色の翅芽(翅のもと)がある。自由に歩くことはできるが、動きは緩やかである。通常は花房の奥深くや、枝葉のつけ根の隙間に寄生して師管液を吸汁し、甘露や白色ロウ物質を排出する。
  - (4) 本種はビワ樹上で年間を通じて発生し、5回程度世代を繰り返すとされる。春先には花や幼果、新芽で増殖し、成虫が5~6月頃に多発生する。7月中旬~8月の盛夏には成虫が樹冠内部に隠れて休眠状態となり、枝先の葉上にはほとんどみられなくなる。活動を再開するのは9月以降で、枝先に集まって交尾し花蕾に産卵し世代を重ねる。冬季もビワ樹上でみられる。
  - (5) 本種は4~6月に発生する春夏型と10月~翌3月に発生する秋冬型がある。春夏型は黄褐色、秋冬型は暗褐色となるが、季節の変わり目にはそれらの中間的な色彩も見られる。

## 6 被害

- (1) 主に幼虫が排出する甘露に糸状菌（カビ）が発生し、黒く汚損される「すす病」が発生する（写真2）。
- (2) 果実が肥大・成熟する5～6月頃に顕著な被害をもたらす。
- (3) 袋かけを行う前の3月時点で既に果房や幼果の隙間に寄生していると、袋かけを行っても被害が発生する。

## 7 防除方法

- (1) ほ場をよく見回り、3月以降の果実のすす病および5～6月の葉裏の成虫を目印に本虫の早期発見に努める。成虫は黄色に誘引されるため、侵入が警戒される地域では黄色粘着トラップによるモニタリングが有効である。
- (2) 発生が確認された園地では、果実袋かけ前の3月頃と、摘房・摘蕾後の11月中旬頃に薬剤を散布する（表1）。また、他県の事例では、1年に最大10kmの速さで分布を広げている例があり、本虫の侵入に十分警戒する必要がある。
- (3) 幼虫は花房の奥深くや狭い隙間に潜んでいるため、散布薬量を十分に確保し、ビワ樹全体に丁寧に散布する。また、ビワ枝葉の表面を覆う微毛が薬液をはじき、薬液が付着しにくいことから、薬液には展着剤を加用する。



写真1 ビワキジラミ成虫



写真2 果実のすす病症状

表1 ビワキジラミに適用のある登録農薬（令和3年6月現在）

農薬の名称	農薬の種類名 (成分+剤型)	IRAC コード	希釈 倍数	使用時期	使用方法	本剤の 使用回数
スプラサイド乳剤 40	DMTP 乳剤	1B	1500 倍	開花期まで	散布	2回以内
サンマイト水和剤	ピリダベン水和剤	21A	3000 倍	収穫3日前まで	散布	2回以内
ロディー水和剤	フェンプロパトリ ン水和剤	3A	2000 倍	収穫前日まで	散布	4回以内
スカウトフロアブル	トラロメトリン水 和剤	3A	2000 倍	収穫3日前まで	散布	3回以内
スタークル顆粒水溶剤	ジノテフラン水溶 剤	4A	2000 倍	収穫前日まで	散布	2回以内
アルバリン顆粒水溶剤	ジノテフラン水溶 剤	4A	2000 倍	収穫前日まで	散布	2回以内
オールスタースプレー	ジノテフラン液剤	4A	原液	収穫前日まで	希釈せずそのまま散布する。	2回以内
モスピラン顆粒水溶剤	アセタミプリド水 溶剤	4A	2000 倍	収穫前日まで	散布	3回以内

※各農薬の使用回数は同一成分を含む農薬の総使用回数と同じ。同一成分を含む他の農薬の散布時には注意。

この情報は、大阪府環境農林水産部農政室推進課病虫害防除グループ・ホームページ  
<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/> でも公開しています。

